

SELECTED STUDENTS' WORKS

from studio course 2001

TAKEYAMA STUDIO "A house for ONE"

MOTOKI YAMAMOTO

SHOKO HARA

TAKAMATSU STUDIO "STRONG/WEAK ARCHITECTURE"

SATOSHI KAWAKAMI

MASASHI ONO

MUNEMOTO STUDIO "TIME"

EIGO NAKAI

TADAHIDE TODA

スタジオコース

学部の4年生は毎年「スタジオコース」と呼ばれる設計演習課題に取り組むことになる。

それぞれの担当教官が独自のテーマを設定し、学生はそのテーマに応じて、自らの望むコースを所属する研究室に関係なく自由に選択するといった、いわば卒業設計の前哨戦だ。

その様々な作品の中から、3コース6名の作品をここに紹介する。

STUDIO COURSE

In the 4th grade, undergraduate students take the design class called 'studio course'.

Each professor sets up his original subject, and students select freely regardless of their laboratory. These studios, so called, are 'the preliminary skirmish' of diploma projects.

We will introduce 6 works among the various courses.

D.B. mono wo kaku hito no ie
a coffin for living & uneasy dreams & books

Yamamoto Motoki

「巣穴を作り上げた。どうやらうまくいった。」 この一文で始まるカフカの「Der Bau」という寓話は 「しかし、少しも変わりはなかったし、それに……」 という一文をもって結末を迎える。

目に見えぬ敵に怯えるその小動物はカフカ自身であるとともに、不安や恐怖に怯える独身者の姿でもある。 Der Bauというドイツ語が「巣穴」とともに「建築」を意味するならば、独身者にとっての住まいに「完成」はない、むしろ「未完」の状態こそが「完成」なのかもしれない。

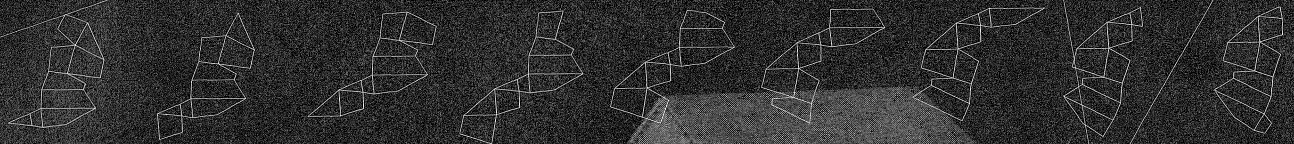
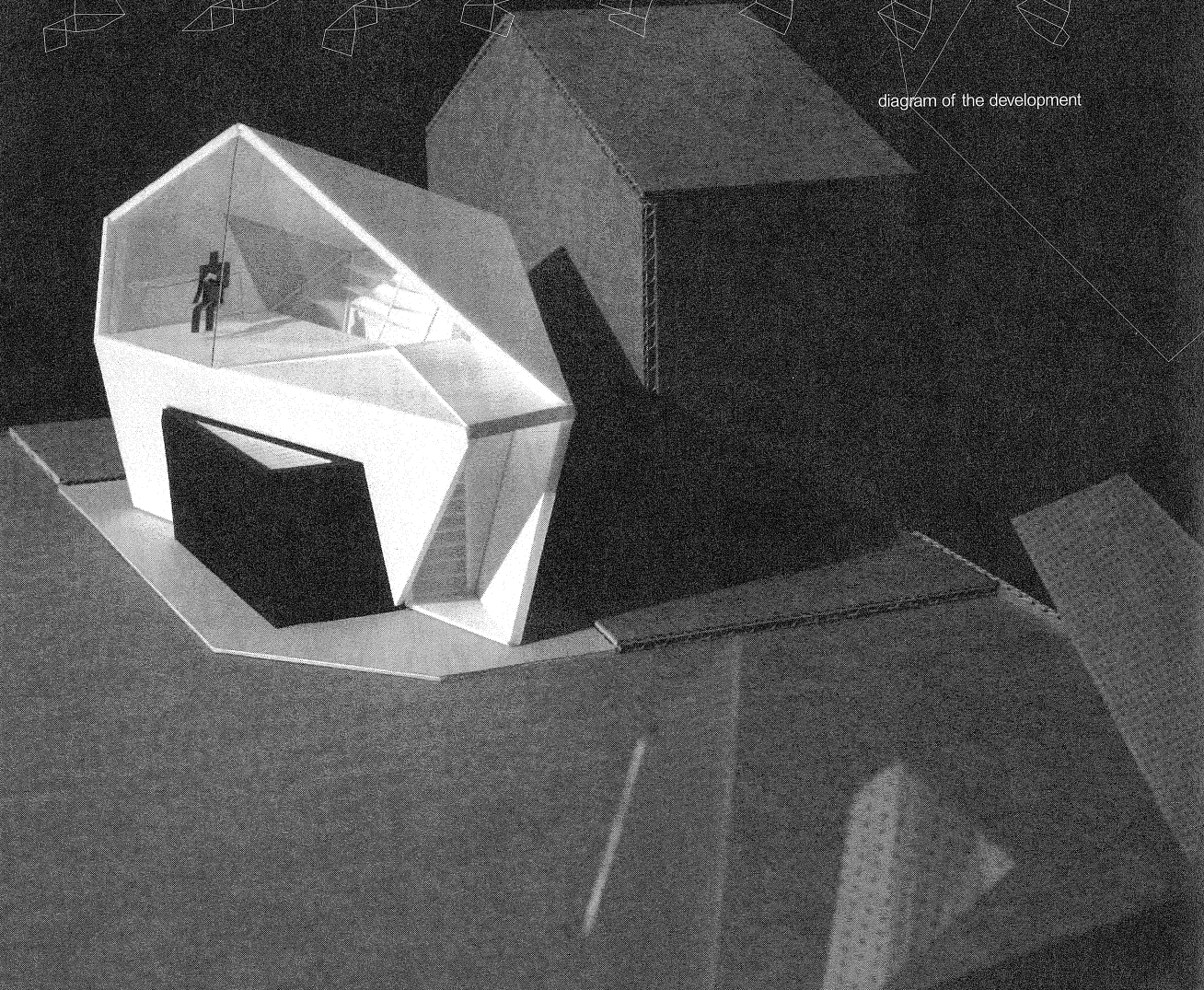
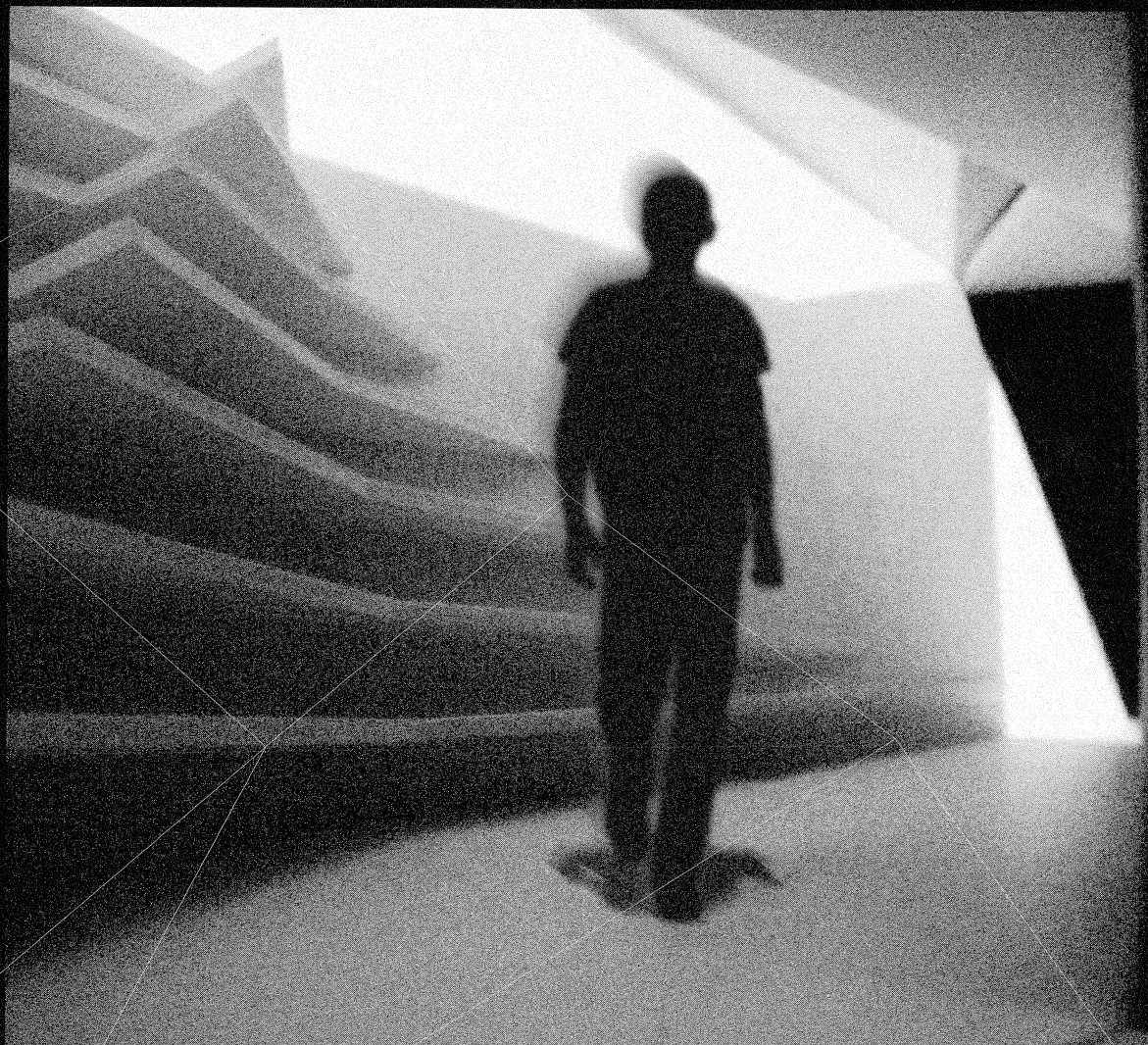


diagram of the development





腹が減ると「大銀」という名の大衆食堂に足を運ぶ、日替わり定食は相も変わらず六百八拾円也。みそ汁はやはりちと塩辛い。そして煙草をふかしながらこう思うのだ、「家でも建ててみるか・・・」と。私は学生だった頃この辺りに住んでいた。なぜか今もこの土地を離れられずにいる。特別、愛着があるわけではないが、慣れというものは恐ろしい・・・。

いつからであろうか、私は小説を書くようになっていた。今ではものを書くことで生計を立てている。家には本の山、私は本と共に暮らし、そして荷風のように死にたいと思っている。

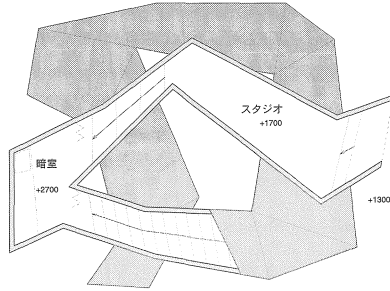
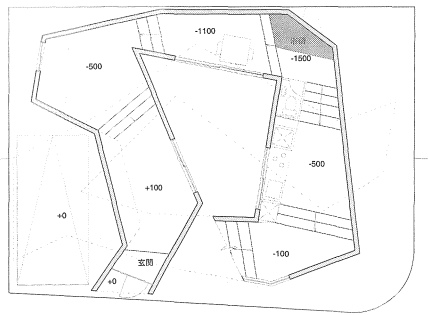
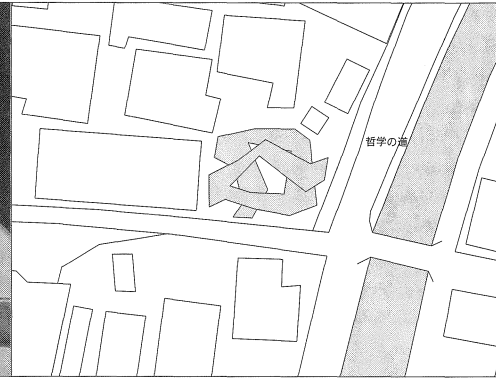
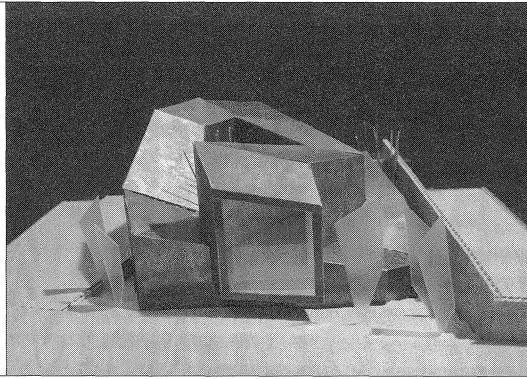
私は不安に駆られてものを書く、ときにそれはリアルな悪夢だ。カフカの「巢穴」の小動物が不安に駆られて巢穴を試掘するように、私は必死に、と言よりむしろ、気が狂ったようにものを書く。他人が私を奇妙な目で見ているのを知っているが、他人の目は気にしない。少ない友人も一度も家に呼んだ事がない、私は頑固で非友好的な人間だ。今朝、コーヒーを飲みながら決断した。「家を建てよう、私には巢穴が必要だ！」と。

彼の名は山本基揮という。基本的には良識のある紳士だが、妄想癖があるらしく、独り言をよく口にする。そんな彼が私に住宅の設計を依頼してきたのは、今年の春のことである。敷地は公園と白川に面した小さな角地、彼の要求はまず第一に小さいこと、本棚があること、そしてものを書くスペースがあることであった。私の提案した住宅の概要は次のようなものである。

生活するために必要な機能を出るだけ小さな規模にまとめたボックスと、それを覆う創作空間としての殻と、そして空間を結びつける本棚かつ階段、この三要素で小さいながら多様な空間を生み出し、住宅を構成する。彼の言葉を借りて言うならば、「生きるための棺桶と不安な夢と本」その三要素で彼にふさわしい「巢穴」をつくるのだ。

先日、彼にあったとき彼は自慢げにこう言った、「私はこう見えて、案外、几帳面な方だし、バナナと牛乳があれば、生きていける。」ますます意味の分からぬ男だと思った。

写真家の家



敷地は京都の哲学の道沿いの傾斜地である。
一年中観光客があふれている。

仕事の関係で、暗室は欲しい。
あとは、気が向いたときに個展を開けるような部屋があるとよい。

その部屋は、たまに友達を呼んで騒いだり、
必要なときには写真のスタジオとしても使いたい。

普段の生活にはそれほどの質は要求しない。
最低限の生活さえ保障されていればそれでよい。



犬と住む家

「犬を飼いたいんです」
彼女の要求はそれだけだった。

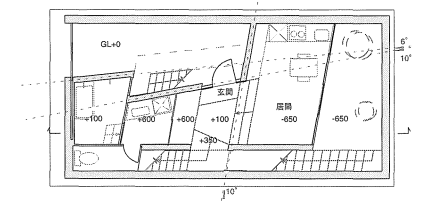
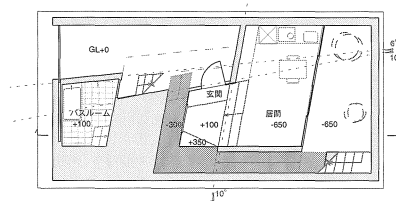
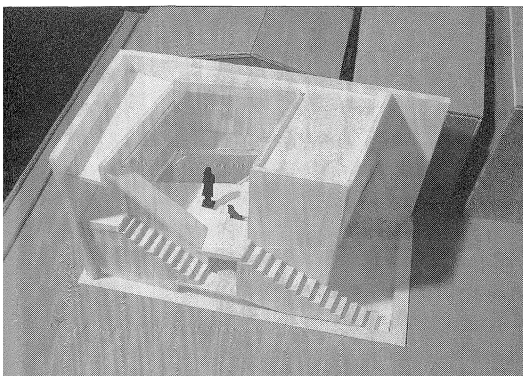
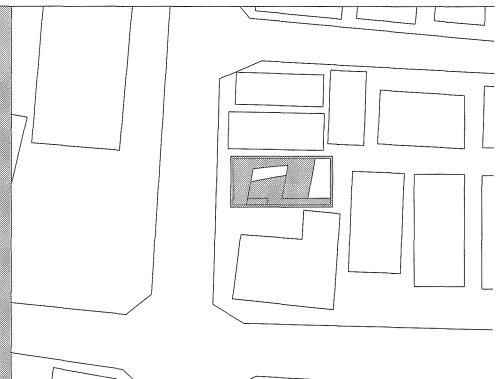
39歳、独身。
ごく普通の会社に勤めるごく普通の女である。

小さい頃からの唯一の夢が、「犬と住むこと」であった。

ぜいたくもせず、コツコツ貯めてきたお金がある程度の額になったので、今回、庭付きの住宅を建てようと思ったのであった。

「普通の家でいいんです。普通の生活ができれば私は満足なんです。
ただ、そこに犬が欲しいだけなんです。」

彼女の要求はそれだけだった。



「見たこともない家が欲しいんだ」

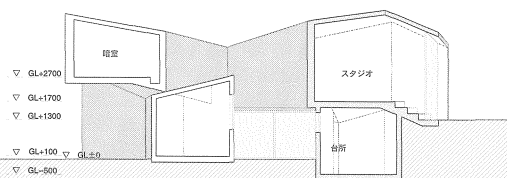
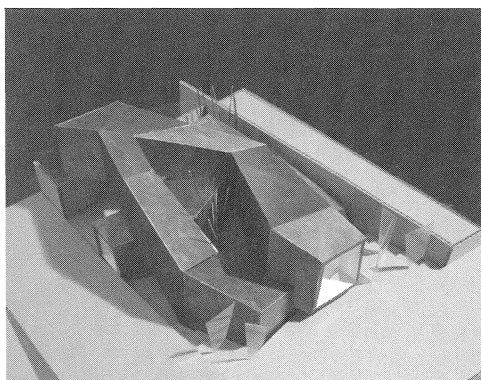
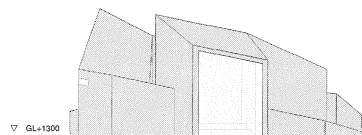
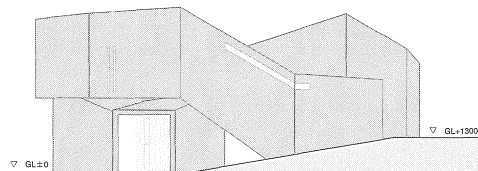
そういったのはいかにも芸術家という風貌の男性である。

49歳、独身。
風景写真を専門とするカメラマンである。

彼の写真は独特の魅力があったが、今まではあまり注目されず
かなりの貧乏生活だったようである。

最近やっと少しずつ人気もでて、
安定した収入を得ることができるようになったという。

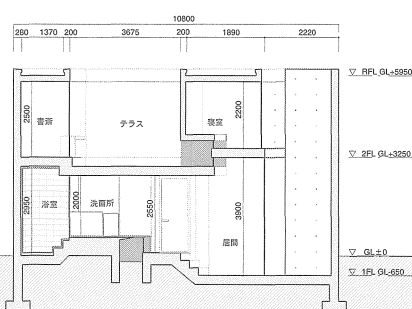
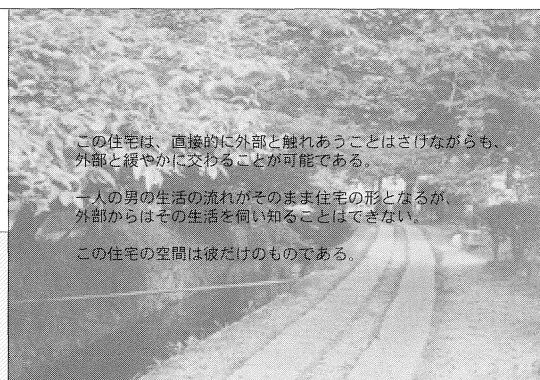
「ずっとオレだけの家が欲しかったんだ。」



この住宅は、直接的に外部と触れあうことはさげながらも、
外部と緩やかに交わることが可能である。

一人の男の生活の流れがそのまま住宅の形となるが、
外部からはその生活を伺い知ることができない。

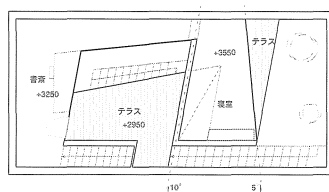
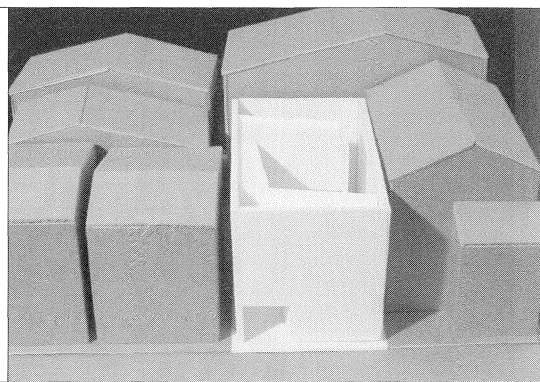
この住宅の空間は彼だけのものである。



敷地は京都の東山、白川通りに近く、
周りには住宅やマンションが所狭しと立ち並んでいる住宅街である。

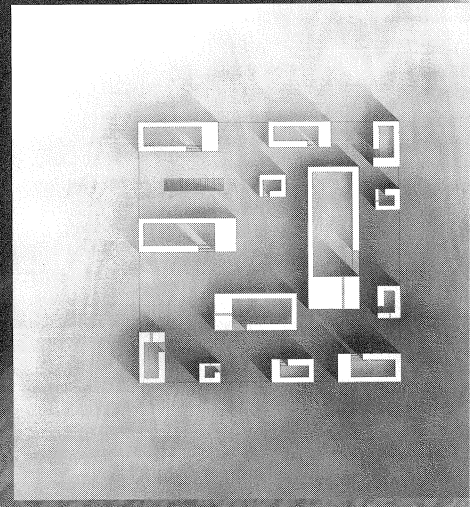
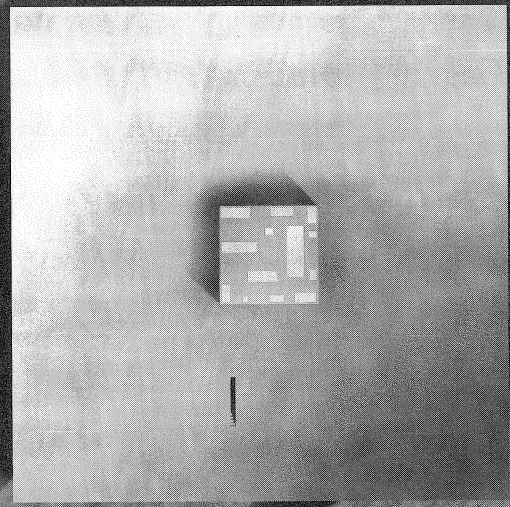
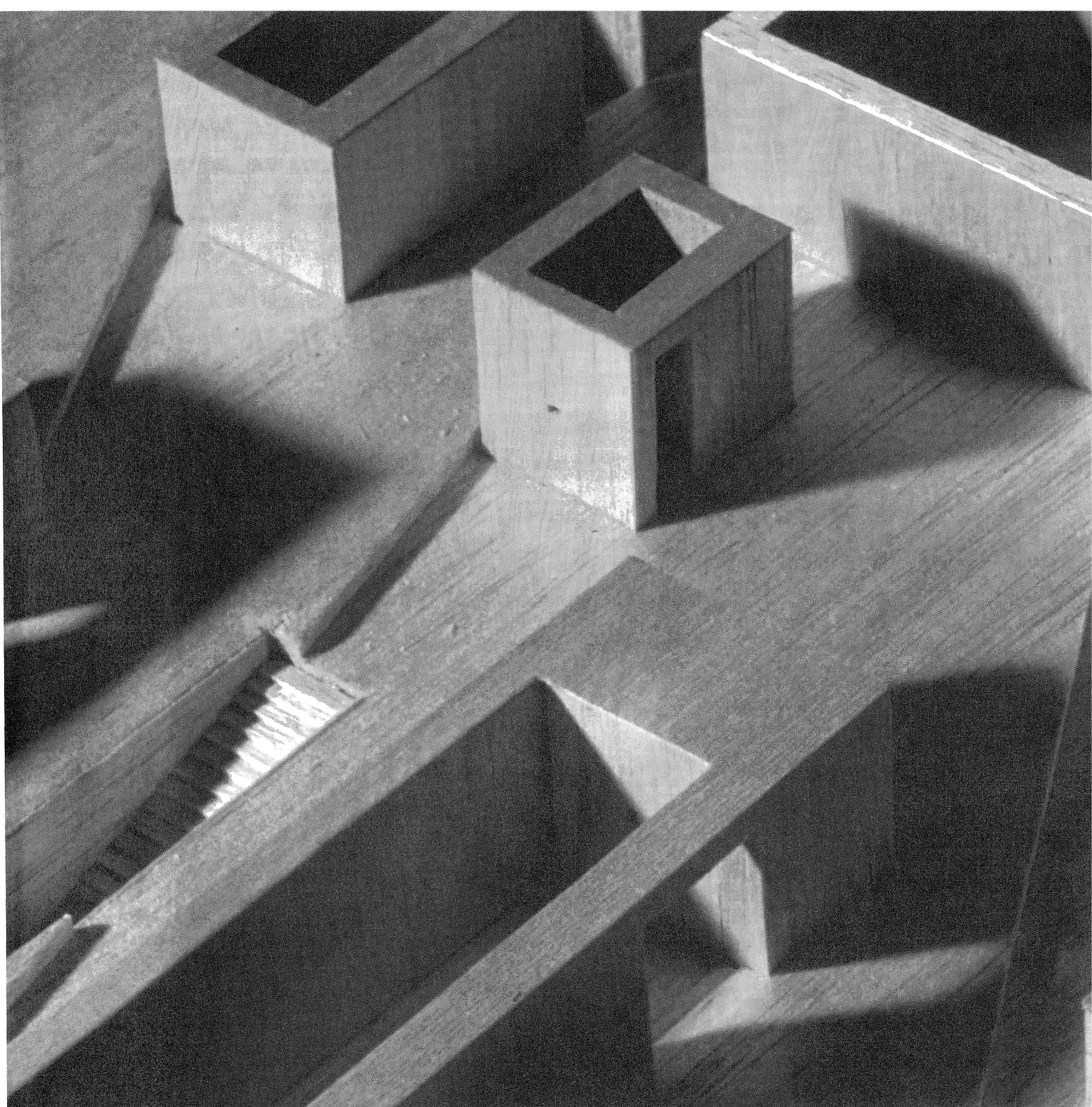
彼女が飼いたい犬は、おとなしく、賢い、大型犬であるらしい。
また、彼女が出動しているあいだは、犬は室外でその帰りを待つ
ことになる。

人付き合いはあまり得意でなく、友人が遊びに来ることはほとんど
ない。
休日は家で犬とのんびりすごすことが多いであろう。



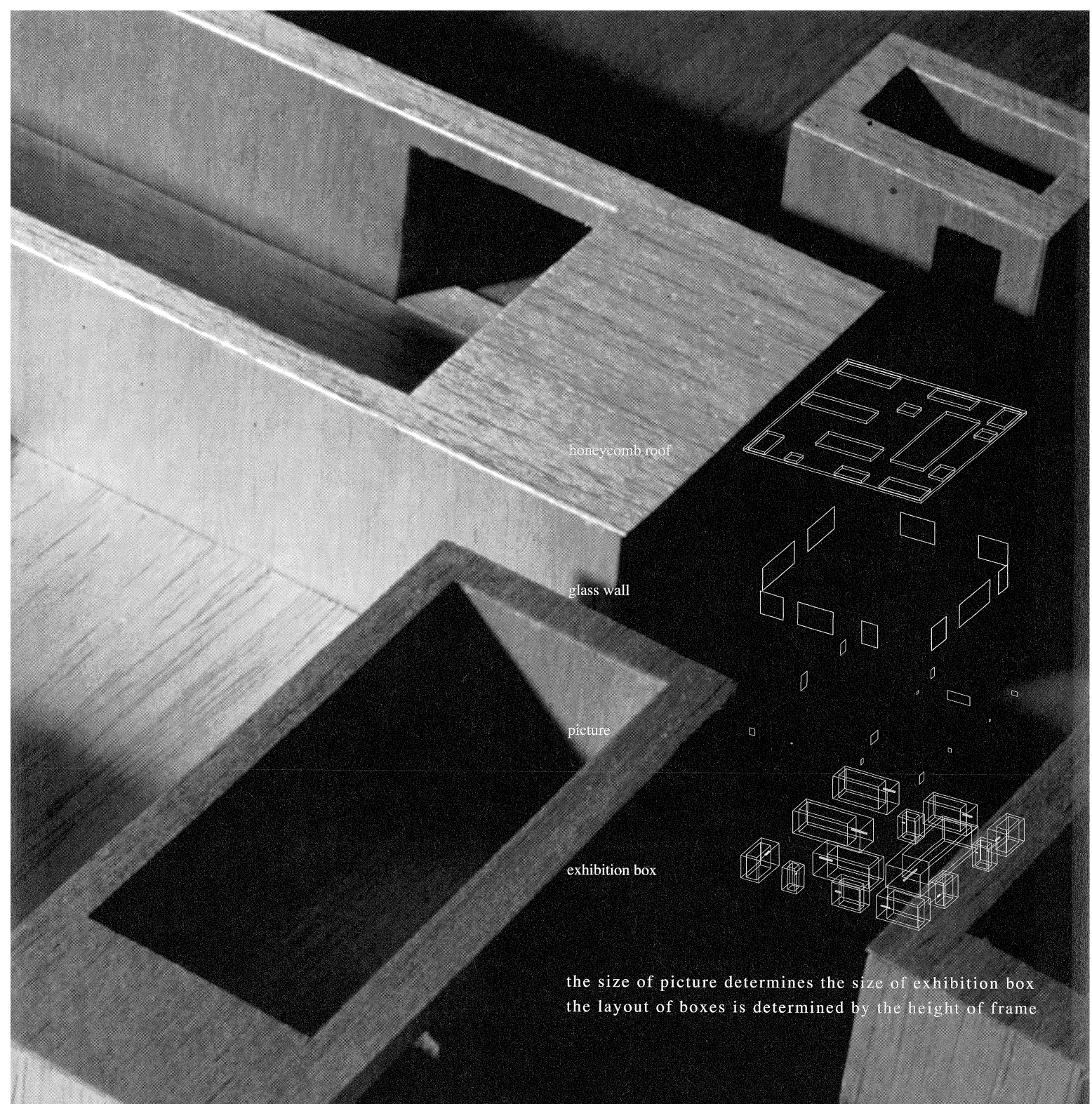
この住宅は、人のための家ではない。

人と犬と一緒に住むという行為がどのように住宅に現れるべきか
を考えた一つの提案である。



ANTONI TAPIES MUSEUM

SATOSHI KAWAKAMI



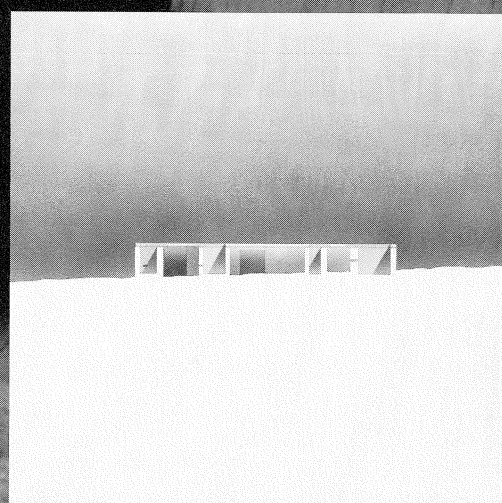
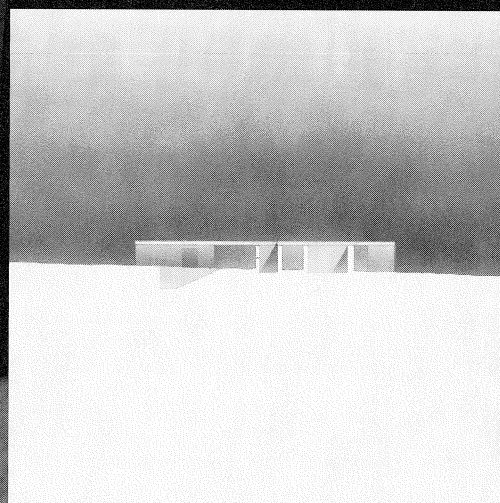
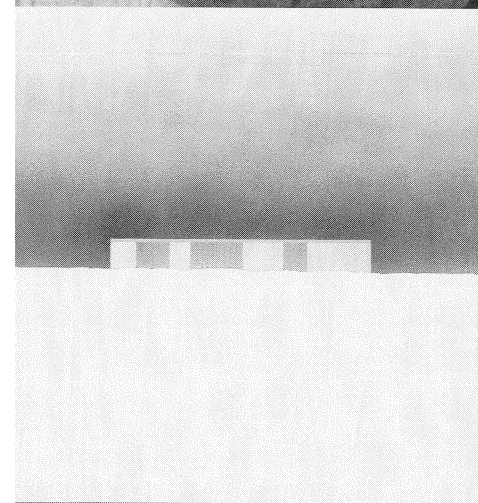
honeycomb roof

glass wall

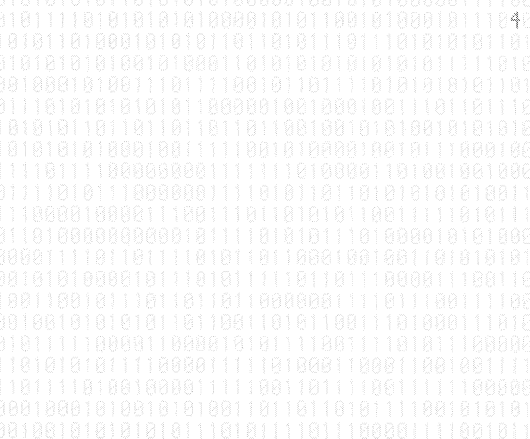
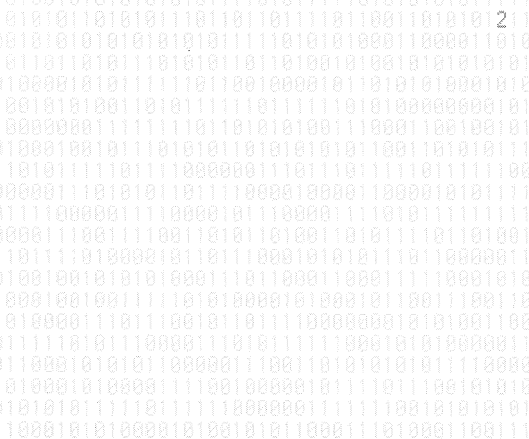
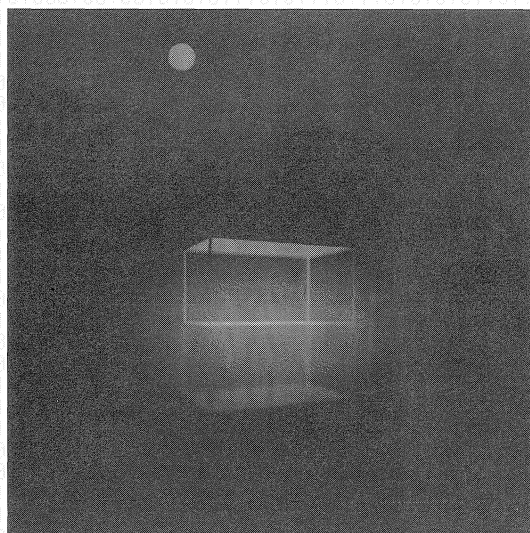
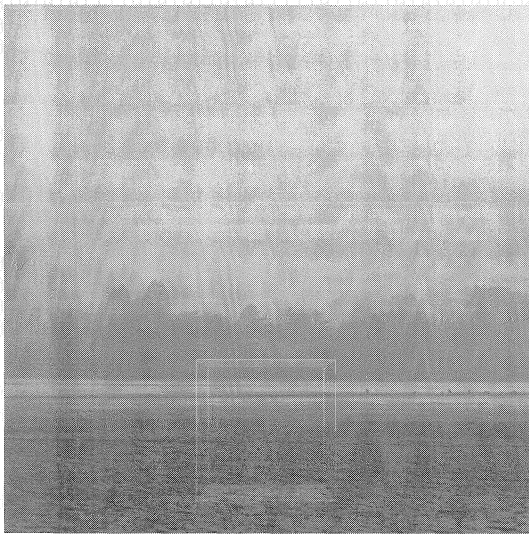
picture

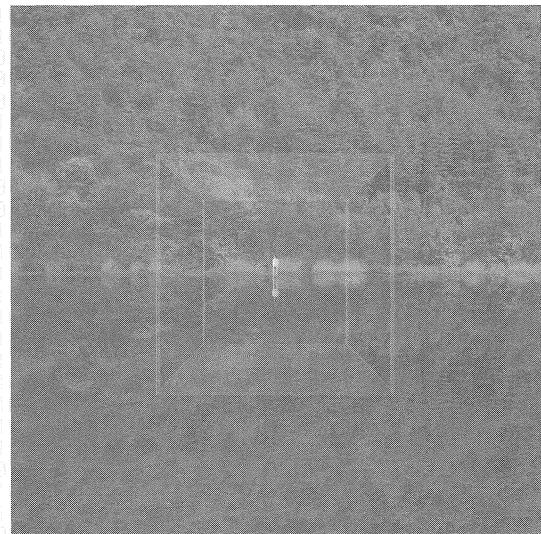
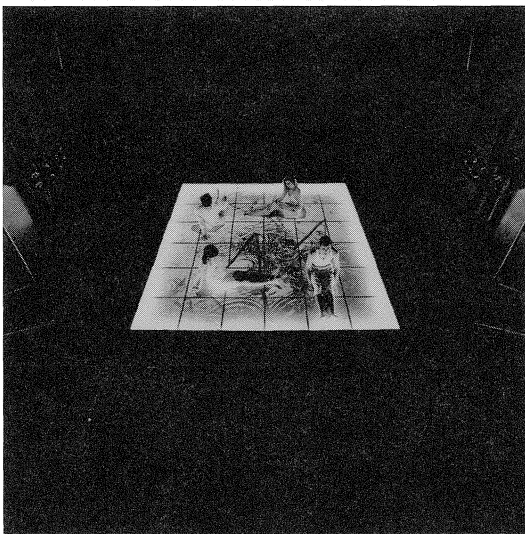
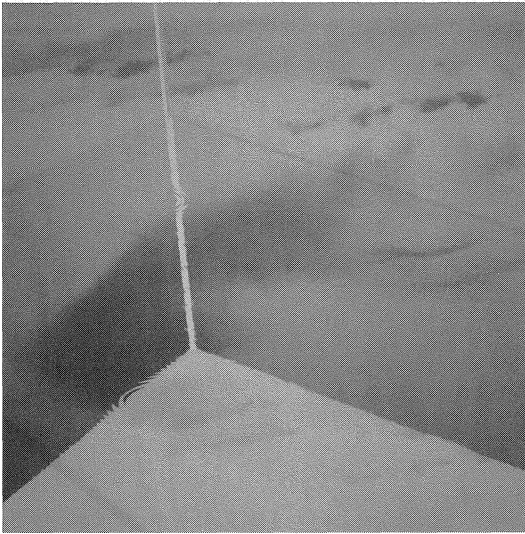
exhibition box

the size of picture determines the size of exhibition box
the layout of boxes is determined by the height of frame

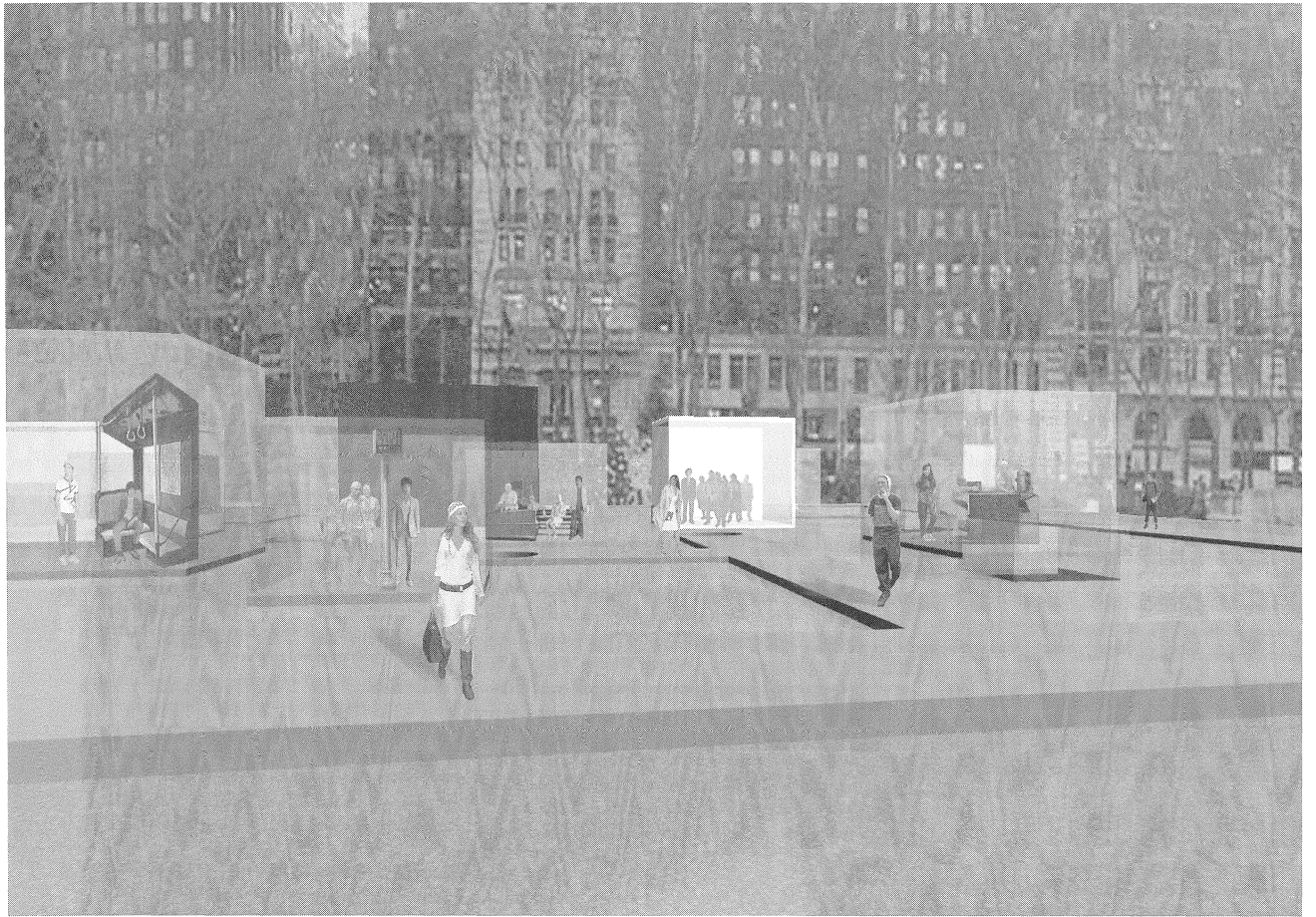


TAPIESの作品は、土、壁、藁、糸、布、椅子、ベッドといった物質や、手形や足跡、傷跡といった痕跡、あるいは、アルファベットや数字といった文字などによって構成されている。その物質、痕跡、文字それ自体は、普段の生活において何気なく目にすることができる卑近な「もの」にすぎない。しかし、鑑賞者が、その目に映る「もの」の奥にひそむ「真実」を捉えることができたとき、それは強い衝撃を与えるものとなる。





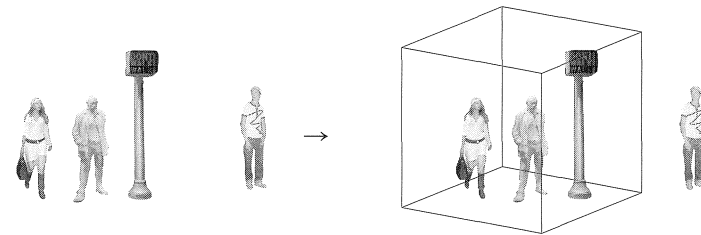
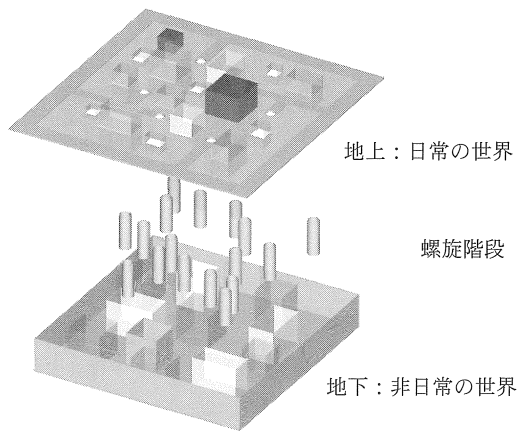
ダムタイプ、彼らの表現手段はパフォーミングアーツである。彼らは自らの身体を用いて空間を創り出す。つまり、彼らは建築の創り出す「有の空間」を必要としない。それを否定したところにあるもの、「無の空間」こそ彼らのための建築と言える。しかし、「無の空間」など現実存在するのだろうか。否、「無」は心の中にしか存在しない。今の私にできることは、いわば「無のための空間」を創ることだけであった。人々はこの建築を媒介として自らの中にある「無」を垣間見る。この建築は、演者がいて初めて輝くことのできる、脆くはかないスクリーンである。ゆえに、この建築は弱い建築と言えるのではないか。



George Segal Museum

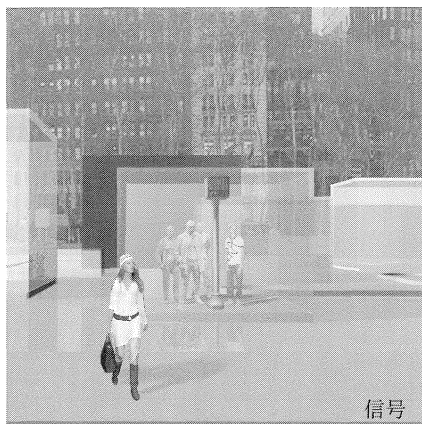
As People Museum





ガラスの箱は空間を切り取り、「場面の外」と「場面の中」の関係を生み出す。

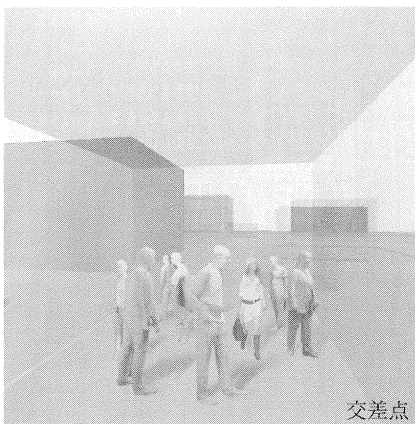
一般大衆の日常の場面



信号

ガラスの箱の中、都市を背景に作品を見る。
人間も作品の一部であるかのように見える。

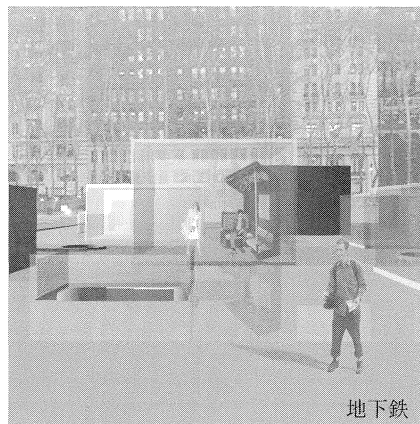
舞台装置を取り去り、抽象化した日常場面



交差点

都市の風景から隔絶されたすりガラスの箱。
光のみある抽象的な空間。

舞台装置のみのガラスの箱



地下鉄

見られているのはあなただ！

人間の死や聖書の悲劇の場面



処刑

ガラスで隔てられた人間が入り込めない空間

社会の裏側の迫害される存在の場面



ゲイ・リベレーション

照明で像と人間の影が投影される。
ゲイたちも一般大衆と同じ人間であるのだ。

何も無い真っ暗な箱



閉じ込められているのはあなただ！

ナチスのユダヤ人大量虐殺の場面

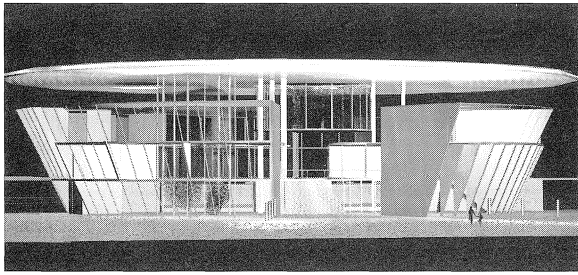
シーガルの両親は第一次大戦後、ポーランドで迫害を受けてアメリカに移住したユダヤ人である。
シーガルは自らの感情と強い批判をこめ、自身の像を作品の中に横たえた。

「この作品の前に立つとき、人は攻撃者でもあり同時に犠牲者でもありうるのだ。」

地上のガラスの箱に混ぜて暗闇の箱を配置する。人は突然暗闇に入り込む。
人間と作品だけの空間。人間もこの作品の一部となる。



大量虐殺



STATION × SCHOOL

Tadahide
Toda

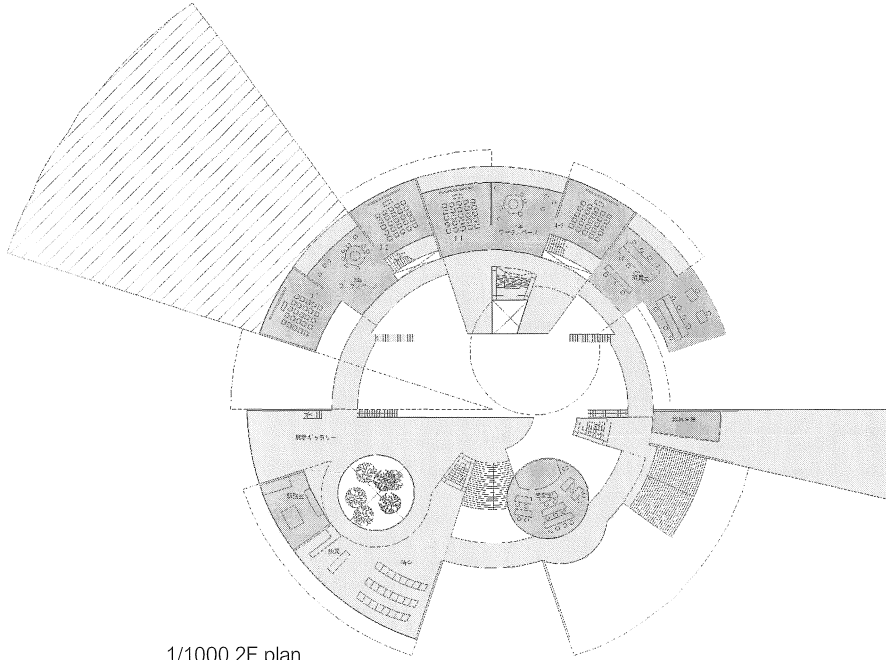
駅に列車が到着する
町から出てゆく人
家へ帰る人
しばしのにぎわい
そして列車は去ってゆく

チャイムがなり、
休み時間が終わる
教室へ戻る子供たち
残された運動場には
静けさが再びおとずれた

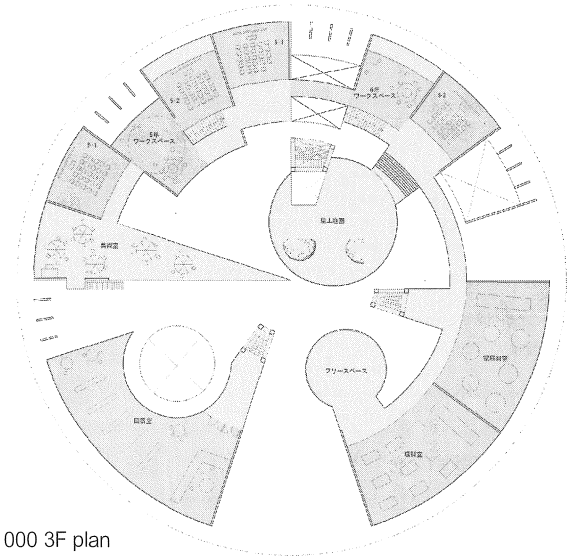
チャイムの音
ホームで待つ人
おこられる生徒
かけこみ乗車
楽しそうな授業
町へ来た人
休み時間のさわめき
午後の列車
旅立ち
子供の頃の記憶
・・・
交錯の場所

駅に流れている時間と
学校に流れる時間

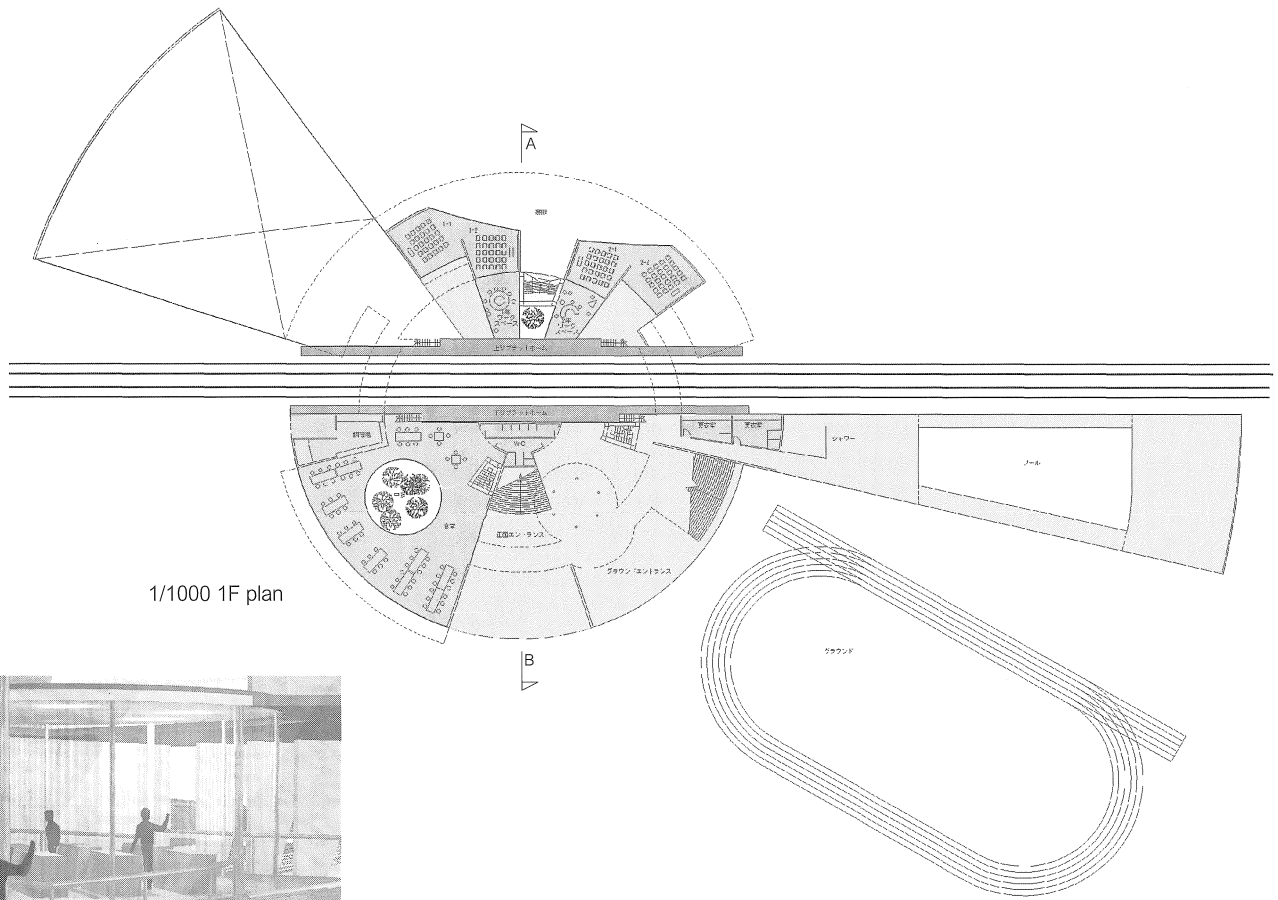
STATION×SCHOOL



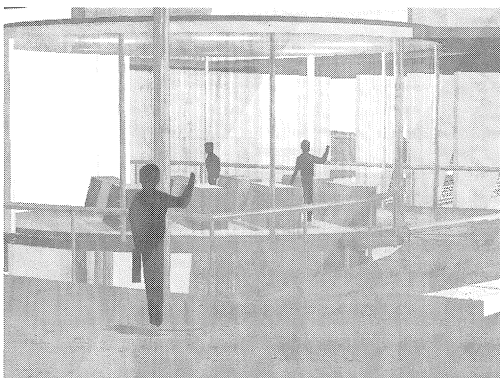
1/1000 2F plan

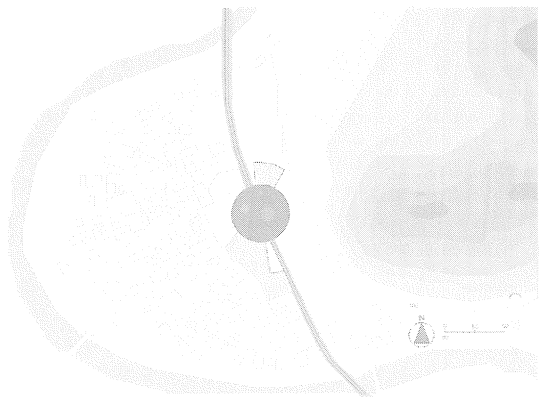


1/1000 3F plan

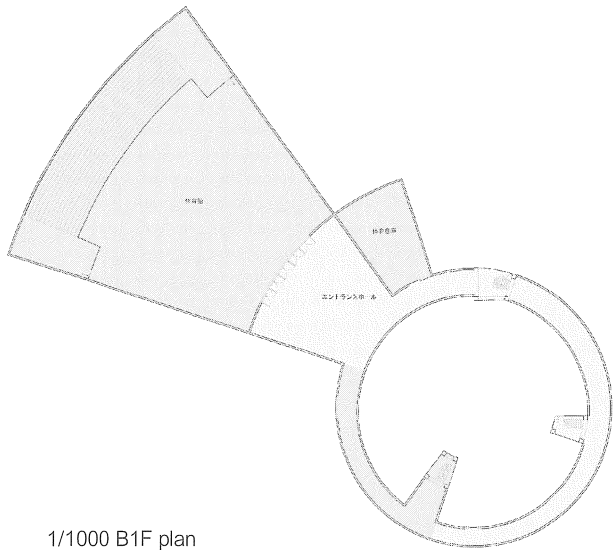


1/1000 1F plan

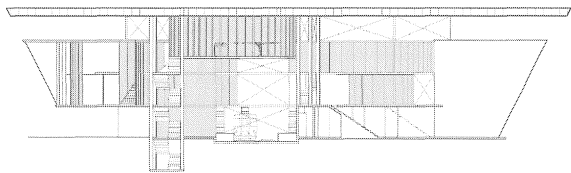




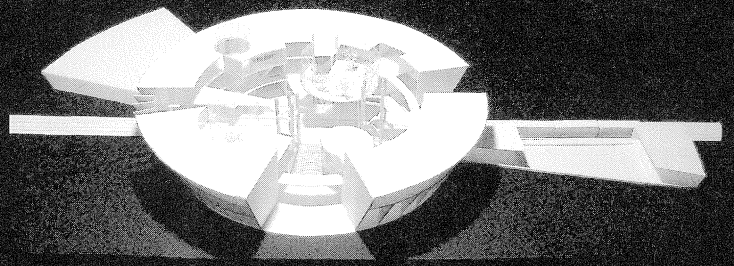
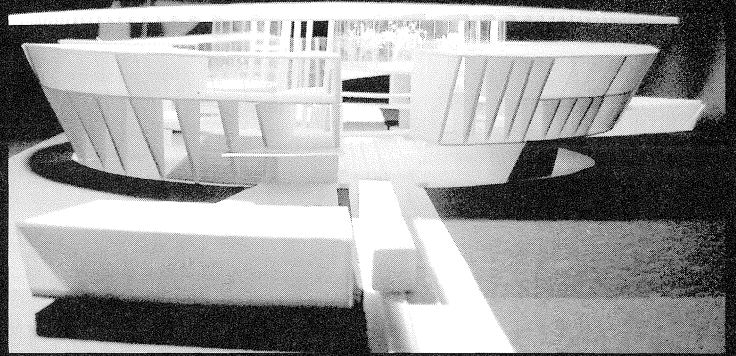
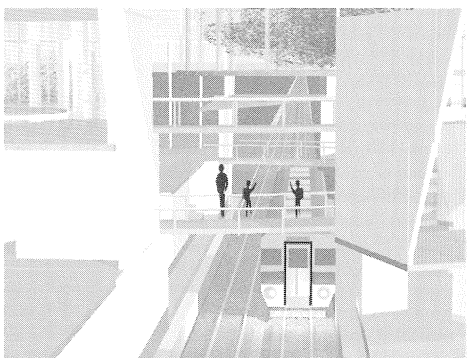
site map (Wachi,Kyoto)



1/1000 B1F plan



1/1000 A-B section



夕闇の町に明かりが灯り みな家へと帰ってゆく
 駅はこの時間 大人たちの学校となり
 またにぎわいを見せている

子供たちはもう寝る頃だろうか
 集まりが終わり
 最終列車がいつてしまうまで
 STATION×SCHOOLの明かりは町に浮かび上がる